

こころの古層と現代の意識

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■研究目的

心理療法を行っている、まだプレモダンなこころの古層が生きているのではないかと感じさせられることが多い。たとえば、非常に現代的な生き方をしている人であっても、箱庭や夢では物に魂を認めるようなこころの存在が感じられるというように、こころとは決して一元的な単体としてのイメージで捉えられるものではない。

こころや意識は時代の要請に応じて変化していくものである。現代の日本においてもそれは顕著であり、たとえば精神症状においても1970年代には神経症、1990年代には解離、2000年代においては発達障害が目撃されたように、その流行には変遷がみられる。こうした変化は、文学作品や思想、倫理など、多様な対象に反映されてきたものと考えられるだろう。しかし、蓄積された歴史や思想は、現代においてまったく消滅したのではなく、「こころの古層」とも言える深いところで息づいている。こころがこのように多層的で可塑性を持ったものであるとすれば、現代においても「こころの古層」は我々の生き方に何らかの方法で影響を及ぼしていると考えられるのである。

本プロジェクトではこのような発想をベースとして、「こころの古層」と「現代の意識」の2つの視点からこころに迫り、現代の日本においてこころの古層がどのように息づいているのか、また、現代の我々がどのようにそうした深く古い知恵と関わり、それを生かしていけるのか、その可能性を探っていく。

■平成24年度の研究成果

i こころの古層を探る

こころの古層とはどのようなものであるのかについて、日本古代の存在様式を探る人類学、さらにはそれを精緻

化したと考えられる仏教思想、あるいは後の文学作品等、思想的なアプローチを含めて検討した。中沢新一連携研究員との計3回の研究会では、それぞれ「華嚴思想にみるこころの古層」「折口信夫の古代研究」「折口信夫における発生と噴出—祭りの発生と翁の発生より—」がテーマとなった。

たとえば、折口の『古代研究』は、一見、言葉の音韻的な響きによって日本語のつながりを示し、その起源をたどっていくように見える。しかしそれは、ひとつの「源」という実体的な一点を目指そうとする実践ではなく、蠢き、生まれてくる動き自体を捉えようとする精神に基づくものである。それゆえに、だじゃれのように横滑りするのではなく、広がりの中に豊かさを含む。このような視点から折口は、「うつ」には「空っぽ、何もない」という意味と同時に「満ちている」という意味があると指摘する。「“うつ”なる＝満ちた＝空の」ものは、単にそこにあるだけでは十分ではなく、桃太郎やかぐや姫が桃や竹から発見されるように、切られ、発見されなければならない。

現代の心理療法においてもこれとほぼ同じ契機が認められる。たとえば近年の発達障害の心理療法では、クライアントの閉じた世界にいかにか切れ目が入るかがポイントとなる。狭義の現実に切れ目が入ることで、その人が本質的に現実に生まれ落ち、他者と出会うこととなる。それは、これまであったものが失われることであり、満ちていたものがつまらない姿になってしまったとも考えられるが、それは同時に、この世に真に生まれ落ちるために必要な作業ともいえる。心理療法とは、このようにすぐれて逆説的で弁証法的な作業であり、「うつ」なる状態とそこから抜けるという動きのもとにはこころの古層における動きと知恵がそのまま

働いているという新たな視点が見出された。

ii 現代の意識を探る

現代のこころや意識の特徴について、こころの古層をその基礎に踏まえつつ検討した。平成24年度は、近代意識との関連で捉えられるC・G・ユングの『赤の書』、村上春樹に代表される現代の文学作品や、心理療法事例、あるいは震災後のこころのケアの活動の中で見出された知見等、様々な社会事象を素材とし、こころの古層という視点を通して現代の意識の特徴を捉えることを試みた。

たとえば河合は、柳田國男『遠野物語』99話や、村上春樹『かえるくん、東京を救う』などを参照しつつ、「震災とこころのケア」の実践的な活動を通して得られた知見について考察した。災害などによってこころの回復が目指されるときには、往々にして公平な支援が目指される。しかし、たとえば最も悲惨な地域に支援に行った人たちよりも、待機部隊の方がこころを痛めているなど、こころに起こる変化とは、被害の大きさには必ずしも比例しないものである。こころには「可塑性」があり、それは子どもたちの描く自由画の変化にも現れていたことが示された。その成果の一部は日本箱庭療法学会一般公開シンポジウム等、講演や研修会などにおいて発信された。



2012年10月に米子市で開催された日本箱庭療法学会一般公開シンポジウムのチラシ